

新規採用教職員辞令交付式
教育長講話
「新任教職員に期待するもの」

◇日 時：平成 31 年 4 月 1 日（月）

◇場 所：県立郡山高等学校



辞令交付



教育長講話

1 はじめに

皆さん、こんにちは。奈良県の教育長の吉田と申します。本日新たに 347 名の皆さんを私の後輩として、採用することができました。やっと教職員になれたという思いをもっている人もいます。そして教職員となった責任と、その重責を担うことに対して、改めて緊張している人もいます。奈良県の子供たちが安全で、安心して、そして健やかに成長できるように、今後存分に力を発揮してほしいと思います。

いよいよ平成の時代の終焉を 1 か月後に迎えようとしています。新たな年号は「令和」、万葉集から採られたようですが、5 月から新たな時代がスタートします。皆さんは平成で採用され、平成から令和の時代になる時に、教師生活をスタートすることになります。

2 Society5.0 とこれからの教育について

私は昭和の後半から平成にかけて教員生活を送ってきました。平成の後半にはもう教育委員会事務局に入り、今教育長をしています。私は、県立高校で平成 11 年まで、数学の教員をしていました。数学の教員は、校務分掌で教務部に入ることが多くありました。教務部は時間割を作ったり、文書を作成したり、成績の処理をしたりする分掌です。教務部では、コンピュータを使うことがよくありました。その頃にコンピュータが出始めました。

平成 3 年に、NEC が世界で初めてカラーノートパソコンを出しました。私も喜んで、それを買に行きました。そのパソコンは当時 59 万 8000 円でした。今、皆さんが使っているノートパソコンは 10 万円程度だと思います。平成 3 年当時は、非常に処理能力の低いパソコンが約 60 万円もしました。現在は、そのノートパソコンが 10 万円程度で買える時代になっています。しかも

その処理能力は、あと数年もすれば、人間一人の脳に相当する処理能力をもつだろうと言われて
います。2045年になったら、全人類の脳に匹敵するようなコンピュータができるだろうと言われ
ています。いわゆる Society5.0 の社会がいよいよやってくるのです。Society5.0 というのは、人
間社会のバージョンを表した言葉のことです。バージョン 1.0 は狩猟社会、狩りをしてきた時代
です。バージョン 2.0 が農耕社会、農業で発展した社会です。それからバージョン 3.0 は、産業
革命が起こり、工業が発展した社会です。バージョン 4.0 は情報社会と言われる社会ですが、こ
れからバージョンが 5.0 の、超スマート社会になると言われています。この超スマート社会を実
現する、そのベースになるのはいわゆる AI です。人工知能の発展です。この人工知能によって
社会が大きく変化する、そんな時代に入っています。

私は趣味で囲碁を打ちます。囲碁は今や、ネットで相手が誰か分からなくてもゲームを楽しむ
ことができるようになってきました。この囲碁や将棋という世界では、絶対に AI が人間を超える
ことができないと言われていましたが、囲碁や将棋の世界であっても、世界のトップが AI のソ
フトに敗れました。囲碁というものは盤面の中に、どのような世界を構築するのかと、自分で考
えて碁を打つことが重要で、打ち手は無限にあります。そのため、なかなか AI のソフトでは勝
てるまではいかないだろうと言われていました。けれども、そんな囲碁の世界であっても AI は
人間を凌駕したのです。

ほかにも、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、自動運転の車の完成がもう
そこまできています。会話ロボットも実現できています。多言語対応の翻訳機などは、もうすぐ
できるだろうと言われ、実用化に向けて研究開発が進んでいます。また、最近では AI が描いた
絵がオークションで約 4800 万円で落札されました。しかし、AI が絵を描くと言っても、AI は
いろいろな美しい芸術作品のいいところを取ってきて、それを絵に表現するだけなのです。絵を
美しいと評価するのは人間です。また、AI 自体は、絵を描きたいという欲望をもっているわけ
ではありません。今の AI は、あくまでも計算機です。計算機は、四則演算で、そのデータを処
理するのです。四則演算ということは、引き算は足し算の逆演算ですし、割り算はかけ算の逆演
算ですから、結局は足し算とかけ算でしか処理できないのです。だから AI の研究者というのは、
何を常に考えているかという、例えば画像処理をするために、あるいは質問に答えるために、
それらをすべて数式で表そうとします。つまり、AI の研究者は、常に数式でどのように表すか
ということに頭をフル回転させているのです。

未来には、AI に現在ある仕事の多くが奪われるかもしれません。我々が、今後子どもを育て
ていくときには、この AI を活用できるような子どもに育てていかなければならないのです。そ
して、私たちは、この AI というものについて、何ができるのか、また何ができないのかとい
うことを知っておかなければなりません。

私は、AI が到達できない領域というのは、何かを好きになるということだと思えます。AI
は絶対何かを好きになるということはありません。人がデータを与えて処理をするだけです。だ
から何かを好きになるということ、やはり教育の中で大事にしていく必要があるのではないか
と思えます。何かを好きになるという気持ちがあれば、当然何かに夢中になるという行動として、
子どもたちに表れていくでしょう。好きという気持ちが、夢や志をもつことやチャレンジするこ
とにつながる原動力になります。好きだから夢中になるという行動になるのです。

私は昭和30年に生まれました。その頃、子どもが一番好きな、人気のあるものを表現した「巨人・大鵬・卵焼き」という言葉がありました。みなさんは聞いたこともないと思いますが、私が少年の時には「巨人・大鵬・卵焼き」で育ってきました。「巨人」というのは、読売ジャイアンツのことです。「大鵬」というのは、もう亡くなられた大横綱の名前です。「卵焼き」というのは、美味しい食べ物の代名詞になっていました。そんな「巨人・大鵬・卵焼き」が流行語となる時代に子どもの頃を過ごしました。

この巨人には、2人の有名なバッターがいました。それが王選手と長嶋選手です。王選手は、とにかくホームランをよく打ちました。「一本足打法」という打法を開発して、ホームランを何本も打ちました。日本記録はもちろんのこと、世界記録も達成しました。一方、長嶋選手は、とにかくチャンスに強いバッターでした。天皇陛下が観戦に来られる天覧試合になったりすると、この長嶋選手はヒットを打ったり、サヨナラホームランを打ったりしました。そのため、王選手は記録に残る選手と言われ、長嶋選手は記憶に残る選手と言われていました。私は記憶に残る長嶋選手が非常に好きでした。そのことから巨人を応援していました。

長嶋選手は野球が大好きでした。小学校4年生の頃から野球をはじめ、とにかく野球が好きで、野球に夢中になった少年でした。野球に関しての情熱はもの凄いもので、プロ野球選手になってからの長嶋選手は、試合に臨む前に必ず素振りに没頭したそうです。長嶋選手の場合は、投球コースや球種を一球一球イメージしながら素振りをしたそうです。これはまさにイメージトレーニングです。昭和30年代にイメージトレーニングをしていたのです。そのイメージトレーニングはあまりにも強烈なもので、いいボールが来るのをイメージしたときは、「今の球は手が出ないな。」などと言いながら、トレーニングをしたそうです。だから単なる素振りではなく、一試合分のイメージトレーニングを集中してやっていたのです。

私は教材研究のときや研究授業をする前に、イメージトレーニングをしても、授業を再現して、子どもから、どんな質問がくるかということ想定しながら、その質問に対して何を答えるか、そして、ほかの子どもがどんなことを返してくるか、そこまでのイメージをもって、臨んだことがあまりありませんでした。でも、イメージトレーニングをしっかりとすることは、我々教職員の世界でも必要だと、私は思っています。特に大事な授業をしなければならないというときは、しっかりイメージをもって、事前研究をすることを大切にしてください。

3 子どもの心に火を付ける

有名な教育学者ウィリアム・アーサー・ウォードの言葉にこんな言葉があります。「平凡な教師は言って聞かせるだけ、よい教師は説明ができる、優秀な教師は自らそれをやってみせる、最高の教師は子どもの心に火を付ける」皆さんも子どもの心に火を付ける、そんな教職員になってほしいと思います。

新学習指導要領の実施が目前に迫っております。新学習指導要領について話をするとき、よくアクティブ・ラーニングという言葉が出てきます。アクティブ・ラーニングとは、子どもが主体的・対話的で深い学びをするような授業や教育活動のことです。今までいろいろなアクティブ・ラーニングの実践を研修したり、見たりしましたが、どうも対話的ということだけが表に出て、子ども同士でおしゃべりをさせることがよいという風潮が見られるような気がします。子ども同

士が対話をして、子ども同士で何かを見付ける、つまり、子どもが主体的にもの考えるというところが抜けてしまっているのです。対話をさせれば、アクティブ・ラーニングにつながっていく。要するにグループディスカッションをすれば、それがアクティブ・ラーニングなのだというように誤解している人がたくさんいます。まずは、子ども自らが主体的に考えなければなりません。そして、考えたことを表現して、議論を深めていかなければならないのです。これがさらに深い学びにつながっていくこととなります。そういった学びが子どもの心に火を付けるのです。だから、このようなアクティブ・ラーニングについてももしっかり研修していただく必要があると思います。そして、皆さんには、それぞれの場所で専門性を生かし、子どもが何を考えているかということ想像して、アクティブ・ラーニングを実践していただきたいと思います。まずは、子どもにアクティブ・ラーニングを実践させるために、自らがアクティブ・ラーニングを実践することから始めてください。教職員自らが学ぶ姿勢をもってください。いくら知識やスキルを身に付けていても、学ぶ心や学ぶ姿勢をもっていないと、当然子どもは見透かします。子どもは先生の後ろ姿をよく見ていて、先生の後ろ姿で子どもは教わるのです。ですから、子どもの心に火を付けられる教職員になるために一番大事な力は学び続ける力です。自分自身がしっかり学び続けるという姿勢をもって、教職員として成長して行ってください。

4 奈良県の教職員研修について

学び続ける教職員を支援するために、奈良県では教育研究所を中心に教職員を支援する体制を整えています。教育研究所というところは、皆さんの初任者研修の校外研修を実施するところですが、皆さんを支援する場でもあります。それから2、3年目の若手教員の研修も行っています。ほかにも、大学院に行って勉強したいという人には、教職大学院で2年間研修できるような制度もあります。従来は大学院で学ぶ場合、2年間の授業料を払う必要がありましたが、1年目は大学院に行って勉強し、2年目には大学院と教育研究所で研修してもらうことにより、2年目の授業料は不要になりました。ほかにも、未来の小学校教員の養成も教育研究所でやっています。これは次世代教員養成塾と言います。高校2年生から、小学校の教員になりたい生徒を集め、小学校の免許状を取得できる大学に協力いただき、月1回程度授業をしていただいています。優秀な小学校の教員を育成するために、奈良県ではこのようなことも行っています。

教員の中には不祥事を起こす人がいます。不祥事を起こしたら、本人が自分の一生を棒に振るだけでなく、その学校の子どもたち、先生方に大変大きな迷惑がかかります。だから奈良県にいる先生が誰一人として不祥事を起こさないということを、私は絶えず願っています。

先程、子どもの心に火を付けられる教職員になるためには、一番大事な力は学び続ける力であると言いました。その次はコミュニケーション能力でしょうか。コミュニケーション能力の中でも聞く力がない人というのは、絶対に成長しません。ぜひそれぞれの学校で、管理職や先輩、同僚の話をよく聞いてください。もちろん聞き流す力も必要です。聞く力は、聞き流す力も含めた力であるということが重要になっていくと思います。今後もずっとよい教職員でいるために、「聞く」ということを常に意識してください。知識や情報は常にアップデートする必要があります。人からしっかり話を聞くということは、知識や情報をアップデートすることにつながります。いろいろな対応能力をもって、アップデートする力が付けば、教職員のプロになれる。

5 辞令書・宣誓書について

辞令書について、皆さんに少しお話をしたいと思います。辞令書の一番上には、「あなたをここに採用する」と書いています。県立学校に着任される皆さんは、県に採用された県の職員です。市町村立学校に着任される皆さんは、その市町村で採用された市町村の職員と認識してください。ただ、市町村で採用された皆さんも県費負担教職員ですので、給料は全て県でお支払いします。服務監督は市町村の教育委員会です。県の教育委員会は皆さんの任命権をもっています。任命権というのは採用する、退職する、処分するなどの権限をもっているということです。それから先ほど、服務の宣誓をしていただきました。服務の宣誓は、県民に対して行っています。ですから皆さんは公の立場としての公務員となるわけです。公の立場で皆さんは今後生活していくわけですから、当然公平でなければならないし、子どもの信頼を損なうようなことは絶対できません。県民に誓うということは、子どもに誓っていることだと思ってください。

6 おわりに

最後に私の大好きな物理学者アルベルト・アインシュタインの言葉を贈ります。彼は『晩年に想う』という著書の中で、「教育とは、学校で習った全てのことを忘れてしまった後に、自分の中に残るものをいう」と語っています。知識を伝授することだけが教育ではないということです。子どもが、学校で勉強した知識では十分に解決できないような課題に10年後20年後に直面したとき、自らの力を発揮し、解決できるようにすることが教育であるということをアインシュタインは言っているのでしょうか。

たくさんのお話をしましたが、その責任の重さを強く感じるあまり、教職員として勤めることに不安にならないでください。安心してチーム奈良県の一員になってほしいと思います。困ったときには、教育研究所あるいは学校教育課等々の指導主事、私も含めて、教職員の先輩が必ず助けてくれると思います。ともに本県教育に携わる仲間として、自分の資質能力の向上に自ら努めていただき、どうか健康にはくれぐれも気を付けて、奈良県の教職員として第一歩を踏み出してほしいと思います。どうもありがとうございました。